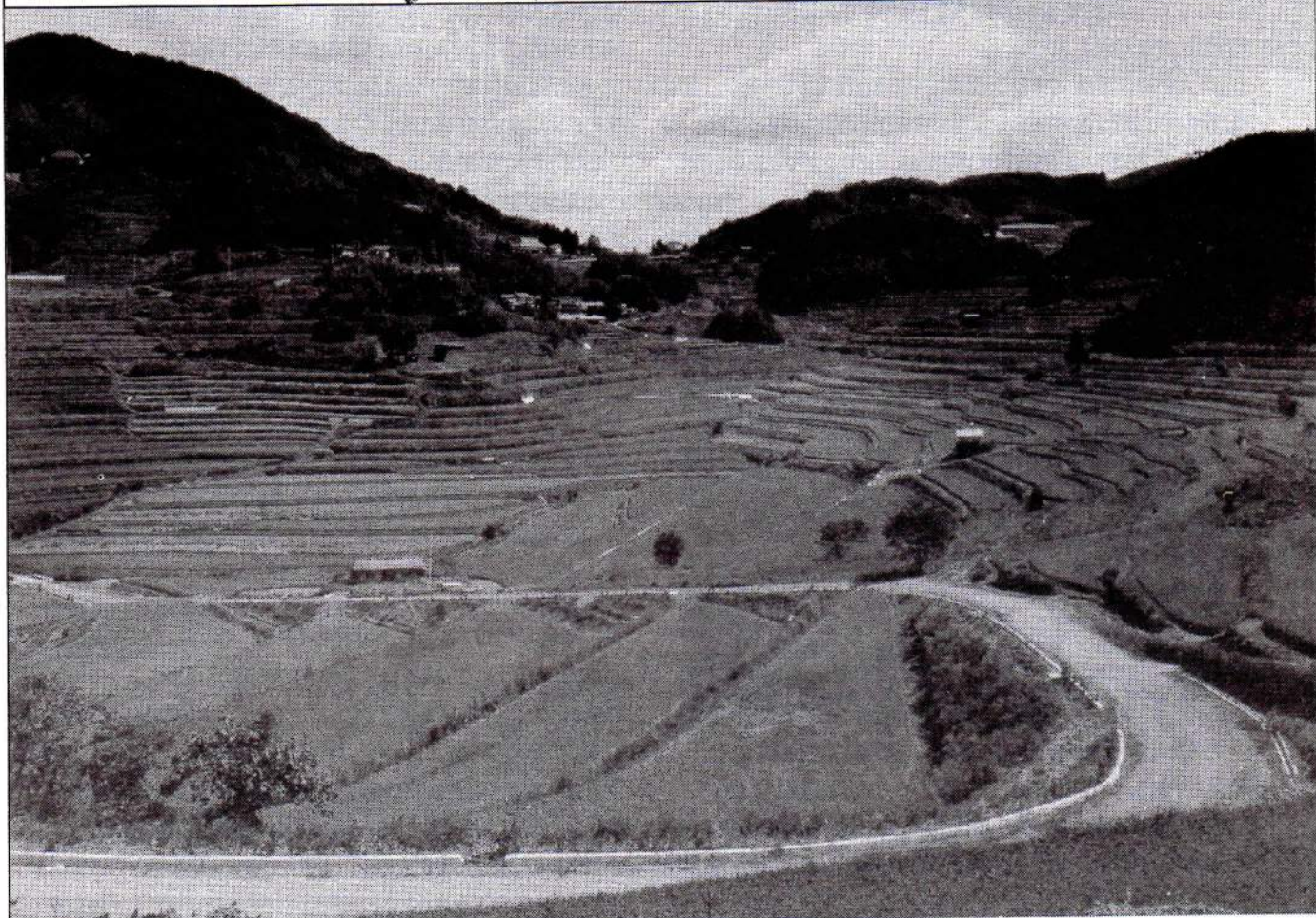


# 棚田学会通信

第7号 2002年6月15日  
発行/棚田学会  
〒184-8577  
東京都小金井市本町6-5-3  
(ふるさときやらぼん内)  
TEL:042-381-6721  
FAX:042-383-8614



## スローガン

『肩組んで生涯現役村作り』

## 大井和西棚田

標高400mの山間地に位置し大きな谷全体に、360度の棚田がすり鉢状に42.2㍎、850枚が広がっている。

## 目次

### 表紙写真・岡山県中央町大井和（おおはが）の棚田

大井和地区・村おこし活動について……………岡山県中央町長・奥村忠夫…1

### 各地の情報

荒廃田の復田・潤える地域づくりに思いをよせて……………静岡県松崎町石部地区棚田保存会・高橋周藏…1

ふるさとの心をとどけます五穀の糧—石川県中島町字藤瀬の棚田—……………中島町農林水産課・田中和義…2

フィリピンの「世界遺産」棚田……………東京都三鷹市・高木宏明…3

子どもたちの“食”を考えたい～やささと農業小学校の試み……………茨城県八郷町・板津洋吉…4

### 官庁ニュース

田んぼの生きもの調査の実施について…農林水産省農村振興局土地改良企画課計画調整室・廣岡由香利…5

伝統的建造物群保存地区制度と棚田の保存……………文化庁文化財部建造物課・島田敏男…6

### 日本の棚田百選紹介

花坂の棚田……………新潟県高柳町建設課・中村由信…6

### 書誌紹介

「九州の棚田」～棚田に生きる人々の営みを映像に……………鹿児島市・佐藤真一…7



# おおはが 大井和地区・村おこし活動について

岡山県久米郡中央町長 奥村忠夫

中央町は、岡山県の中北部に位置し、県庁所在地の岡山市へは46.1km、県北中心都市の津山市へは10.8kmで、JR津山線と国道53号によって結ばれています。

当大井和地区は町の西南部に位置し久米郡の最高峰、二上山を中心とした急峻な地形からなり、農地の大半が山間棚田となっており、町内でも激しい過疎・高齢化が進んでいる地区です。

昭和30年の合併当時2,500人いた人口が現在850人、450世帯が320世帯と激変し、高齢化率では45%を超えています。

このような状況の中で、昭和62年に町とJAが大阪に出向き、町内産米を使用したおにぎりの試食直売会を開催した時、大阪市中央区の消費者グループで結成している『大阪ミナミ無農薬研究会』との出会いがありました。この出会いから毎年田植えと稲刈りの時期には多くの会員や家族が、大井和地区を訪れ農作業体験や子供たちのどろんこ遊び、山菜取りと地域総ぐるみによる交流がはじまり、地域住民の中にふるさとの良さを見直す気運と郷土愛が芽ばえたことを契機として大井和地区活性化運動が起こりました。地域住民と全ての各種団体が推進委員となる「大井和地区村おこし推進協議会」が昭和64年1月1日に結成されました。

当推進協議会では、実態調査や組織づくりを目的とした『村の暮らし活性化事業』に取り組み、

消費者との交流だけでなく、□美しく住みよい生活環境、□景観づくり、□まちと村ふれあいづくり、□ふるさと人材づくり、□農業の基盤づくり等の地域活性化活動を繰り返しています。

さらには、町内の各地に先人たちの汗と知恵により守ってきた棚田が点在しており、これらを現状の中で全て保存して行くのはどうも困難であることから、町内の棚田の中より、□美しい景観を提供している、□地域が積極的な維持・保全の取り組みを行なっている地区を『中央町棚田保存地区』として認定し、保存するための『中央町棚田保存地区設置条例』を平成13年6月に制定しました。

町内の棚田保存地区により棚田保存地区連合会を結成し、町内外の先進地棚田との視察や意見交換会等を行い活性化の向上につとめています。

最近では、住民の意欲が農業だけでなく住環境整備にも目を向けられ、溜池周辺整備として池の周囲に桜2千本を植栽し、奉仕活動として草刈作業を行い、今では町内の桜の名所となっています。また、平成11年農林水産省の『日本の棚田百選』に認定をいただいたことなどにより、アマチュア写真家・棚田見学者が多く訪れるようになり地域の知名度のアップにもなりました。

これらの活動は行政指導型ではなく、地域住民の意思により地域の住民一人ひとりが現状を正しく把握し行動を起こしたことに考えています。

## 【各地の情報】

### 荒廃棚田の復田・潤える地域づくりに思いよせて

静岡県松崎町石部地区棚田保存会 高橋周蔵

静岡県松崎町石部地区(戸数100戸・人口360人)の小さな集落の農業の耕作面積は田が約18㌖、畑が約12㌖あり、昭和30年頃までは農業を主体とした地域構成がなされており、終戦後の食糧難時代には大方耕作されておりました。中でも復田を手がけた赤根田地区の棚田は、約10㌖を有し、駿河湾を眼下に南アルプス、富士山が眺望できるすばらしい景観に恵まれ、米はおいしいと近郷に知られておりましたが、相次ぐ減反政策、高齢化による労力不足等により荒廃の一途をたどり、一枚の棚田すら見るのができぬ5年~20年を経過した放棄棚田となっておりました。

棚田の荒廃は自然の流れと自ら認知しておりましたが、平成9年農水省で棚田保全の気運のある

ことを町担当職員から伺い調査を依頼しました。

昨今、全国棚田(千枚田)連絡協議会、全国棚田学会設立、全国棚田百選認定など棚田保全の認識が高まってまいりました。

このような状況の中、平成11年「ふるさと水と土ふれあい事業」で農作業道の新設、ふれあい施設等の整備を行い棚田を復田して地域の活性化の一助にとの話が県行政サイドからございました。

私は時の区長として役員会に図り事業推進を前提に、対象地権者に説明、各地権者は、高齢、労力不足のため、復田は困難との見解で保全を前提に棚田を無償提供するという区に一任され、区としては保存会を以て行う旨確認し総会に図りました。



計画に対し異論も多くございました。高齢、労力不足、採算が合わないだから放棄された、何で今更……大丈夫だろうか。こうした意見もある中、事業の推進案は承認され事業が決定したのですが、荒廃棚田の復田という難事業故、地域を統括して事業を推進して行くには確実な答えが見えないため、私自身今も不安がいっぱいです。

私共の棚田は、長老の話として、頂にある白崩山が崩落し山津波が発生し、大災害を起こして一帯の棚田を呑み込み石河原と化し、災害に対し年貢が20年間も免除され長期にわたり復田を期した旨、伝え継がれてきたといわれております。静岡県文化情報センター及び石部区所蔵の古文書にも災害の記録があり、言い伝えは実証されました。



平成12年1月保存会のメンバーで復田作業

復田作業は平成12年、まだ正月気分も覚めやらぬ1月4日作業開始、年輪15年～20年を越える雑木はチェーンソーで、茅株雑草は草刈り機で、およそ棚田とは程遠い原野で、復田は悪戦苦闘の日々でしたが、大勢の区民の協力及びしずおか棚田くらぶの皆さんのご支援もいただき、12年度には約3畝を刈りぬき、約12畝を復田し約15年ぶりに甦った棚田で区民と棚田くらぶの皆さんと田植えを行いました。

13年度には、オーナー制度導入に向け試作田として本格的な復田に取り組み、約50畝の復田をなし、前年と合わせ約65畝の作付けを行い、棚田くらぶの皆様方と田植え及び収穫の喜びを味わい棚田の機能回復を確認しました。

オーナー募集には県、町、商工会、マスコミ等のご支援をいただいた結果、当初計画(50区画)を大幅に上回り60組の受け入れが決定し、本年度も約10畝の復田を手がけ約75畝の棚田にオーナー、棚田くらぶの皆様をお迎えして田植えを行う予定でおります。

棚田は1年休耕すると現況に復するには3年かかるといわれます、15年前後の荒廃棚田の復田作業は一言で語ることはできません。また棚田保



復田を終え見事に甦った棚田

全の道は後継者難、いずこも同じで厳しいものがございますが、志を等しくするものが最善を尽くし良い汗をかき、良い背中を見せてやっていたら後継者も必ずできると信じ夢抱き頑張っております。

オーナーの皆様方をお迎えするにあたり不安材料はたくさんございますが、受け入れには万全を期し対応しなければと心しております。

私共は、これを契機に区民一丸となって、文化、自然環境を守り、農村の原風景ともいえる棚田を保全し、エコツーリズムの推進を図り、都会の方々に、お金では買えない里山の豊かさ、すばらしさを満喫していただき、ふれあい交流の場として高齢過疎に悩む地域が潤い発展できるよう願っております。

そして先人の方々が大災害にもめげず泥に塗れ、一畝ずつ台地をおこし石を積み上げ土をあてがいがながら営々と長期にわたり復田を期し、築き上げた血と汗の結晶ともいえる貴重な文化遺産である棚田を後世に伝え残して行くことが今、私共に与えられた責務と思い心新たにしております。棚田保全は高齢過疎に悩む私どもの地域だけではできません。各界各位のご理解とご支援をお願いいたします。

なお、現在までの保全費用は、県・町・中山間地直接支払制度の支援を受け、労力支給は有償ボランティア、日額5,500円(男女共)で行っております。



平成12年しずおか棚田くらぶの皆さんの田植え



# ふるさとの心をとどけます五穀の糧—石川県中島町字藤瀬の棚田

中島町農林水産課 田中和義

## 1 地域の概要

藤瀬集落は、中島町の北部、熊木川上流の山間地に位置し、主要地方道富来中島線沿いに民家が点在し、能登有料道路横田ICが隣接している。集落の世帯数は64戸、人口は238人で、44戸の農家はすべて第2種兼業農家である。

集落の奥地に湧き出る水は霊水「病の治る水」として知られ、年間6万人が訪れていることから、集落全戸のほか地方の方々の出資により、藤瀬霊水公園管理組合を組織し、管理運営を行なっている。

## 2 棚田の保全管理

山間地であるため、稲作の収穫量が少なく、棚田のため労力等の効率性が悪いうえに、減反農地・耕作放棄田が年々増加の一途をたどり、農地はもとより畦法面・農道の雑草が生い繁り、荒廃化が進み景観的にも影響を及ぼしていた。

長年、経費を費やし整備した農地をいかに保全管理と有効利用をできないかを検討を重ね、平成8年度より地域一帯（通称うぎ谷内）を霊水公園管理組合の事業管理区域として、農山村風景を保つため、稲はざ等設置など伝承的な農業活動の展開を図り、農地の利活用をすることとし、地権者（33名）から借地契約を結び、平成10年度から「ふるさと農園」事業として、米生産農地、五穀園農地、野菜園農地、果樹園農地、花卉園農地等として生産物の増産を図っていることから、地域住民から農地が生き返っているとの称賛をいただいている。

## 3 オーナー制農園

農地面積4.8haのうち3.5haをふるさと農園が生産農地として活用を図っている。農作業の準備（耕起・除草・畦づくり・施肥）、共同作業（指導及び作付け支援）、生育管理、収穫物の調整管理等々の農作業に従事する作業員は、常時雇用7人のほか、臨時的に3人、農機オペレーター2人が取り組んでいる。

したがって、平成11年度より学童農園として、子供たちが米、小豆、スイカ、そば・野菜等の作付けと収穫までの学習の場としており、さらに収穫祭（餅つき・そば打ち・豆腐づくり・漬物づくり）も学校や公民館へも出向き一貫とした協力支援をし、今年度ももち米や野菜等の作付けを継続して実施する。

オーナー制会員も稲作作業予定表に従い、自由に参加ができ、無農薬等希望に添った栽培管理と

共同作業（指導及び支援）に付くことができますし、自分の農地の生育状況を見聞するのみでも良い事としている。

会員募集は、愛媛県中島町姉妹町や毎年東京（在京鉦打郷友会）への会員募集活動を実施しているほか、能登中部グリーンツーリズムの受け入れも行なっている。

会員は、リピーターを含め年々増加傾向にあり、平成13年度31人の会員・家族が山里に声を弾ませながらの米づくりに励んでいる。

今年の目標は、35人の予定で募集を行なっている。



棚田オーナーの田植えは家族総出



学童農園で稲刈りをする子供たち



ビオトープも手作りだ！



## フィリピンの「世界遺産」棚田

東京都三鷹市 高木宏明

フィリピンのどこかに「世界遺産」に認定された、すごい「棚田」があると聞いていつかは行ってみたいものだと考えていたが、こんなに早く機会がくるとは思わなかった。昨年の暮、「棚田支援市民ネットワーク」の例会で山羊ひげの叔父さん（CACEPPI 相川氏）がフィリピンの山奥に「水力発電を設置する会」の説明をしてくれ、そのアバダン村やワンワン村はイフガオ山岳地帯にあり周囲は「棚田」だらけと言われた。一方先の大戦では、我が同胞、軍属、軍人をおよそ52万人も失ない、日米の巻きぞえでフィリピンの人は110万人も亡くなったという。最近の阪神大震災や、昨年の9・11ニューヨーク同時多発テロの死者数も世界を震撼させたが、時代が違うとは言え大変な人数である。そして墓標なき我が英霊を慰撫する人達の旅は昭和40年末、もう400回近くも繰り返されているという。うかつにも、そういう事も知らず、慌てて「ルソン」や「レイテ」の戦記を改めて読み始めたりした。かくて去る3月2日突然「PIC戦跡訪問団」の皆さんの幸便に乗って「棚田」グループからは写真家の永田さん、昆虫学者の武井さんと共に3人が参加することになった。

「棚田」の中心地「バナウェ」はマニラの北方370kmの山岳の中にあり（標高800/2000m間）日本からのアプローチには丸2日かかる。マニラ周辺の交通大渋滞と排気ガスは相当なもので、並みの体力では抵抗できない。できればマニラ/バナウェ間で一泊した方がよい。バナウェには立派なホテルがあり、世界中からの訪問者を受け入れている。フィリピン国内客も多く、ミッションスクールの女子学生一行と一緒に来た。人類の「奇跡」の遺産としてこんな立派な教材はあるまい。ホテル眼下にも己に「棚田」が展開して

いるが、翌朝、天候にも恵まれさっそく「VIEW POINT」に案内してもらった。

「SAVOR THE MYSTIC BEAUTY OF THE RICE TERRACES, A UNESCO WORLD HERITAGE AREA」の看板と共に「INTERNATIONAL HISTIC ENGINEERING LANDMARK」と書かれている。

なる程息をのむ景観である。傾斜70度もある急峻な棚田は、田の面積より側壁面の方が広そうである。水周りの設計、耕作者の階段、収穫物、資材、肥料の運搬……どれをとっても大変だと思う。

「棚田」はここだけではない。狭い山道のために、地元的小型ジブニーにのりかえて「フンドアン」まで半日旅行をした。どこもかしこも「棚田」だらけ。ちょうど田植え時期直前で水を張り「苗床」もすっかり育っていた。「ハパオ」「ハタド」「パンガアン」「ポイトン」などの村々にも棚田の名所がある。同行された前記の相川さんや斎藤さんによれば「マリコン」はもっときれいだよと言われる。バナウェ周辺40～50kmは未だ世に紹介されていない「棚田」がゴマンとあるに違いない。

各地で「慰霊祭」を行ない、またかの山下奉文大将の最後の砦「大和基地」方面をうかがい、さらに降伏文書署名の立に寄った「小屋」も見ることができた。

以下断片的聞きかじりである。

・歴史は2000年も前からの耕作という。この周辺のイフガオ族は6～12人の子でくさんで、たえず食料不足のため、棚田面積は今でも増えている。フィリピンの米の生産高は1,200～1,300万tで、時々輸入も50～100万tである。人口は7500万人位なので、日本の一人当たり米の消費量@60kg/年と比べるといかに多いかがわかる。さらに小麦の輸入も250万t位である。



世界遺産「イフガオの棚田」



・棚田米は明らかにジャポニカ（円粒種）の一種、播種は「苗床」からの移植、稲作期間は10ヶ月（？）と長い。収穫は稲の穂先だけを刈りとって高床式の木造倉庫に籾のまま保管している。朝早く子供たちが籾をつき、稲殻をふるい落とす。周囲からすぐ鶏が集まり新鮮な糠やふすまをついばむ。やがて親は茹で水をすてながら炊きたてのご飯を食べさせてくれる。のどかな風景である。鶏肉や卵は大走である。塩気のきいた魚でたっぷりのご飯をいただくのは日本と同じである。時々、真っ赤な野生の猪肉が街道筋で売られていた。レストランでは白いご飯とガーリックライスが定番で食べやすかった。

・周辺にはGOHANという地名やKAKASHIという鳥追い仕掛けもあったが、たんなる偶然か？ 何しろこの辺の事情を説明するものは、農文協の大崎正治先生の御著作しか知らない。先生の稲作論では、水田は中央集権に頼らない山の手が先で、大川のある平地の大治水によるものは後世と言われる。弥生時代の稲作伝播や数多くの九州の棚田群に思いが走る。インドや中国での稲作発生とその伝播ルートを探る事や、フィリピン、バリ、ミャンマー、カンボジア、中国雲南省の棚田群の相互関係など、今後の研究分野は広がる。これら東南アジアを縦断する「棚田サミット」の開催を望んでやまない。

## 子供たちの“食”をを考えた～やささと農業小学校の試み

茨城県新治郡八郷町 板津洋吉

96年のO-157事件、2000年の雪印牛乳事件、2001年の牛海綿状脳症（BSE＝狂牛病）事件と、このところ重大な食に関する事件が相次いでいます。特にBSE事件では、農林水産省の行政の不作为という当然になすべき政策をなさずに重大事件を招き、加えて加工流通業界の不正・偽装事件の発覚という官業による構造的な問題が露わになり、消費者の食に対する不安は極まった感があります。

一方で、日々の暮らしの中で気になるのが、コンビニなどにずらりと並ぶ「食」、その多様な加工食品が子供たちの成長にどのように影響するのか気になります。子供たちが好きなものを、いつでも、どこでも購入し、食することができ、味付けや食品添加物がどのようになっているか、そして食べる子供たちが“孤食”傾向にあることです。家庭の食卓が崩壊寸前にありやしないか、ということも心配です。

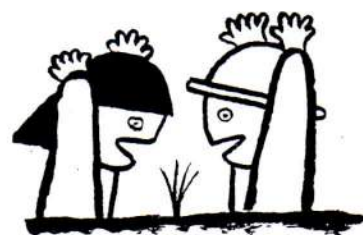
ちょっと大袈裟に書き出しましたが、「食べる」ことの意義を問いただしてみる時代かなと思ひ、「やささと農業小学校」を昨年開きました。場所は茨城県のほぼ中央、筑波山の東の山麓、八郷町の北東の外れです。イノシシも時折出没する穏やかな農村地帯です。

そんな八郷町で、親子でいっしょになって野菜や麦などの種まき、雑草を取り手入れし、収穫して調理、食べてみる……。その体験を通して、食べ物について考え、植物の「種＝タネ」といういのちの源をいただきながら、人は生きてる・生かされているということを感じとっていかうというのが農業小学校です。

昨年初めて開いた農業小学校には、10家族38人が参加しました。そのほとんどの親子が農業体験は初めてでしたが、子供たちはバツヤカマキリを追いかけながらも、暑い日の草取りに頑張り、大きなスイカに歓声を上げて、小さな種からつぎつぎに成るナス、ラッカセイの実の成る不思議に驚きと喜びを感じていました。

今年は18家族の参加で3月末に開校しましたが、学校の週休2日制の影響でしょうか、参加申し込みがだいぶありました。しかし多くの親たちは「野菜はスーパーで買うものと思っている娘に、この体験がなにかの変化を与えてほしい」「親子で育てた野菜をいっしょに食べたい」「食べ物を大切にしている心が育ってほしい」などと“食”への関心を強くもっています。食の伝統をなおざりにしながら、工業製品化とインスタント化がすすむ今の食事情は、長い目で見るとほんとうに心配です。

まだ調べていませんが、八郷町には筑波山系の懐に小さな棚田がたくさんあります。ここでも農業離れがすすみ、かなり放棄が進んでいますが、高齢化の急進であと数年経つと取り返しのつかない状況が予想されます。オーナー制度をつくるなり、あるいは農業小学校に取り入れるなど、保全策を考えていきたいと思っています。





## 田んぼの生きもの調査の実施について

農林水産省農村振興局土地改良企画課計画調整室 廣岡由香利

### 1. 調査の目的

水田や、農業水路、ため池、里山は、農業生産の場であると共に、生物の生育・生息の場ともなっています。

近年、このような身近な自然を大切にしていくことについて、国民の関心が高まっていることが背景となり、平成14年度から土地改良法が改正され、事業の実施原則に「環境との調和への配慮」が盛り込まれました。そのため、事業の方向を自然と共生する田園環境創造型に転換するにあたり、水田周辺水域の生態系の現状を把握するため、平成13年8月～10月にかけて、水田、農業水路、ため池等において、魚類を対象に生物調査を実施しました。

### 2. 調査結果

調査の実施により、わが国に生息する淡水魚（亜種を含む）約300種のうち、72種（約24%）が確認され、農業水路やため池等が、魚類の生息の場としても、大きな役割を果たしていることが確認されました。

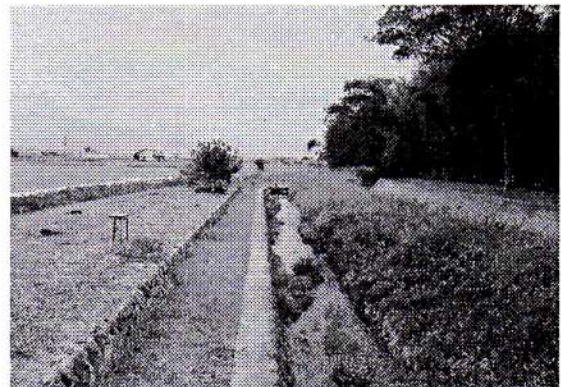
確認種の中には、メダカ、ホトケドジョウ等の希少種が10種含まれていた他、タイリクバラタナゴ、ブルーギル等の外来種が10種含まれていました。メダカは、全国37道府県で確認され、生息環境としては、①流速が緩やかなところ、（20cm/秒以下）、②土水路や泥の堆積したコンクリート水路のところ、③落差工や堰等、水田と水路の移動を遮るものがないところ、④産卵に必要な、水生植物があるところで多く確認されました。

### 3. 環境省との連携

今回の調査において、調査・分析手法への助言、提案及び調査結果の情報交換について、環境省と連携を図りました。特に、メダカを例にして、環境省の自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）と調査結果の情報交換を行ったところ、今まで、自然環境保全基礎調査で確認されていなかった農村地域88メッシュ（1メッシュ＝10km四方）について、新たにメダカが確認されました。本調査により、自然環境保全基礎調査を補完する重要なデータが収集されました。

### 4. 今後の展開

今後も、環境省と連携し、継続的に生物調査を実施します。また、今年度は、魚類に加え、カエル調査を実施する予定です。



調査を実施した水路

## 伝統的建造物群保存地区制度と棚田の保存

文化庁文化財部建造物課 島田敏男

伝統的建造物群保存地区制度が制定されて今年で27年が経ちました。この制度は、文化財保護法上の言葉を借りると、「伝統的建造物群及びこれと一体をなしてその価値を形成している環境を保存するための地区」を地元市町村が主体的に保存をおこなうものです。保存地区のうち、国にとって価値が高いものが重要伝統的建造物群保存地区に選定され、選定地区は平成14年5月現在で60地区となっています。

伝統的建造物群保存地区としては、妻籠や高山などの家並みが続くいわゆる町並がまずイメージされますが、世界遺産となった白川村を始めとし

て、農村集落も伝統的建造物群保存地区として保存されています。この場合、周囲に広がる田圃や畑地等の集落の営みを支えた空間も保存地区に含まれ、建造物群と一体として保存がはかられています。例えば、長野県の白馬村青鬼伝統的建造物群保存地区では、農家の主屋や蔵が建つ範囲に加え、その後背地にあたる棚田や水路や山林も保存地区に含まれ、その面積は59.7haにも及び、棚田は農水省の「棚田百選」にも選ばれています。

制度では、地区における建物のみならず土地の形質にかかわる現状変更行為が許可制となるとともに、農家建築等は「建築物」として、棚田を構



成する石垣は「工作物」として、保存すべき物件として定められています。そして、これら石垣の修理に際しては、建築物の修理と同じように、一定の率で補助が受けられます。

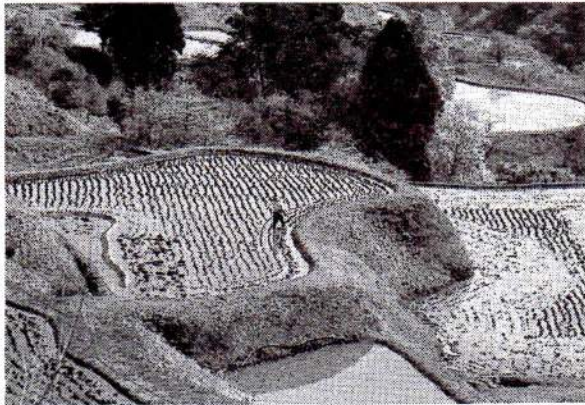
したがって、この制度で、石垣で形成された棚

田のかたちを保存することは可能ですが、これだけでは四季によって変化する本来の田園景観を保存できるとは限りません。このような点で、当学会でなされている棚田における「営み」をいかに継続させるかという議論の成果に期待を寄せています。

## —— 日本の棚田百選紹介 ——

### 花坂の棚田

新潟県高柳町建設課 中村由信



雪解けの春の棚田

高柳町は新潟県の南西部に位置し、町の中央部を鯖石川が南北に貫流しています。総面積は、64.63 km<sup>2</sup>で農地面積はそのうち8%弱しかない中山間地域です。

一般に見られる平らな田んぼが一面に続く景観は当町では目にすることがありません。圃場整備率は30%と低い水準であちこちに棚田が散在している町です。

平成11年度農林省認定の棚田百選に3箇所応募したところ、全てが入選しました。

入選した3地区はそれぞれ維持管理方法が異なり、いかにしたら先祖代々の田畑を残していけるのか試行錯誤を繰り返しながら現在に至っています。

その一つ大野地区にある花坂の棚田は、越後富士と言われる黒姫山の麓の溪流沿いに階段状に田んぼが広がっています。寛政六年(1794)に柏崎市の山田為四郎さんが、柏崎と石黒地区との境界より用水路を引いて農地を開墾し開田された歴史ある田んぼです。

今の通勤農業の様に車で行く農業とは異なり当時は下流にある母屋から上流側の耕作地まで歩いて行く事しかできませんでした。朝早く出ても、田んぼまでの時間が掛かりすぎてしまい思うように仕事できません。やがて田んぼの近くに小屋を建て、そこで自炊をするようになり、寝泊まりをするうちに住み着き、上流に集落ができたとい



たわわに稔った棚田

う歴史があるそうです。

集落の人口はわずか14人で6割の棚田を現在まで10年間管理してきました。近年は高齢化が進み6割が65歳以上の方となり、集落では「あと何年農業を続けていけるかわからない」と言ったひっ迫した状態まで来ています。

現在、棚田は環境保全の機能や美しい景観の観点から見直されてきてはいます。しかし、山腹で傾斜地に階段状に設けられた棚田は、生産基盤整備の低さ、担い手の不足などから耕作放棄が進んでいます。

耕作放棄で一度荒れた農地は豪雨により崩壊し、土砂となって下流に流れ災害を招きます。災害の後は無惨な爪跡を残したまま、復旧の目途も立たない状態で荒れていきます。

一方で、町全体の高齢化率は43%と高く、自分の農作業をやることで他人の所まで手伝いに行ける余裕もありません。地元では「体が利くうちは自分の農地は自分で守っていくが、作業ができなくなったらやめるまでだ」と言っています。

棚田の維持管理、生活環境整備、所得補償また保全のためには資金が必要であり、平成12年度から行っている中山間地域直接支払制度を有効に活用できればと思っています。

このような状況の中、荒廃が進む棚田保全のためには、ボランティア活動による棚田の維持管理



に頼る手法も取り入れはじめています。また、棚田オーナー制を募集して少しでもこの美しい原風景を守り、全国の皆様に見てもらいたいとも考

えています。

町としても棚田保全のため何かお手伝いがないか模索している最中です。

## 【書誌紹介】

### 写真集「九州の棚田」～棚田に生きる人々の営みを映像に

鹿児島市 佐藤真一

町の喧騒を離れ、田園や山里の素朴な風景に出会うとほっと心やすらぐ思いがする。そこには自然と共生する“農”があり、それを営む農家の純朴な暮らしと人情がある。

私は日頃農業とは縁のない生活をしているが、カメラを手にすると足は自然に農村に向かうのである。稲をはじめ様々な作物がいきいきと生育する様や、農家の人々のひたむきでたくましく働く姿に心うたれる。

農村を訪ねると、撮影を通じて働く人々といろいろな出会いがある。あぜ道でお茶をご馳走になりながら、農業や暮らしの話題に耳を傾けるのも楽しい。また、自然の恵みに感謝し収穫を喜び、ほころびる笑みは、豊かな農家の心情にふれる思いがする。

その中で、棚田に関心を抱き写真を撮り始めたのが7年ほど前。近辺の山あいの素朴で小さな棚田との出会いの始まりである。

棚田の魅力は自然と溶け合った造形の美しさにある。畦の描く幾何学模様は、水田の稲の生育と共に様々な表情を見せる。私も多くのカメラマンと同じく、まず、棚田の持つ独特の景観に心ひかれ無心にシャッターを押していた。

しかし、時が経つにつれ、写真の被写体として美しい風景の棚田が、長い歴史を持ち厳しい労力

に支えられていることを知り、撮影の視点も変わってきた。つまり、棚田を単なる風景としてとらえるのではなく、そこに生きる人々の営みを交え記録的な映像表現を心がけ、多くの人にその美しさを気付いてほしいという思いに変わってきたのである。



熊本県球磨町毎床の棚田



「九州の棚田」を出版された佐藤真一さんが筋委縮性側索硬化症（ALS）の不自由の身で寄稿して下さいました。出版された写真集は下記の通りです（中島）。

「九州の棚田」南日本新聞社  
(099-225-6845) 定価2,000円

### 棚田学会の皆様へ「水の声」を募集します！

～ウォータークライシス！水の世界へ伝えよう～

世界水フォーラム準備対応室内「水土里の会」係より

「水の惑星」地球の水資源は約14億km<sup>3</sup>、その内利用可能な淡水はわずか0.01%。風呂桶一杯を地球の水とすると、その量はたったの一滴。この一滴に現在、60億人が依存し、2025年には94億人となります。水が枯渇傾向にある中、水をビジネスチャンスと捉え、水の価格化・水企業化を一律化する動きも活発化しています。でも、水は全ての生き物にとって生命そのもので、その価値は経済面だけで捉えられません。

日本は、棚田や田んぼという水との関わりの中、古来から持続可能な農業や環境との共生が営まれてきましたが、この文化や多様な公益性が世界の水の議論から目が向けられていません。私ども農水省職員有志で結成した「水土里（みどり）の会」は、棚田に愛着を持たれる皆様方へ「水の声」を募集し、来年3月日本で開催の世界水フォーラムを通じ世界へ届けます。是非ご参加を！

送付先 東京都千代田区霞が関1-2-1 農林水産省農村振興局（〒100-8950）

世界水フォーラム準備対応室内「水土里の会」係 TEL&FAX：03-3593-4155 (Faxも可)



## 平成14年度棚田学会大会

と き：平成14年8月4日(日)  
と ころ：三越劇場(東京日本橋三越本店6階)

☆式次第☆

13:00～14:30 総 会  
14:45～17:45 シンポジウム 「棚田を活かす」(会員以外の方：資料代1000円)  
18:00～20:00 懇 親 会 「不二の間」/三越本店7階(会費：5,000円)

### 平成14年度棚田学会シンポジウム 「棚田を活かす」

【報告】

- ◇『棚田を活かす地方自治』  
報告：小山邦武(長野県飯山市長)
- ◇『都会から移り住んで棚田を活かす』  
報告：田村俊夫(高知県構原町)
- ◇『棚田地域の農民が棚田を活かす』  
報告：佐藤藤三郎(農民作家/山形県上山市)  
※お話の順序は変わることがあります。

【パネルディスカッション】

コーディネーター(司会)：  
篠原 孝(農林水産省農林水産政策研究所)  
パネラー：小山邦武 佐藤藤三郎 田村俊夫

---

お知らせ(詳しくは別紙案内にて)

#### 第6回棚田学会談話会

##### 若手発表会 『棚田は夢』

発表者 大澤由紀子(千葉)、神田竜也(奈良)、篠原愷(兵庫)、鈴木茜(東京)、  
鈴木武史(栃木)、土屋わかな(東京)、戸嶋光一(神奈川)、山本若菜(茨城)  
日 時 平成14年7月13日(土) 15時～17時頃(その後は懇親会/会費1,000円)  
会 場 農林水産省農林水産政策研究所(東京都北区西ヶ原2-2-1)  
交通機関 JR京浜東北線・上中里駅徒歩5分  
宮団地下鉄南北線・西ヶ原駅徒歩5分  
会 費 無料(会員以外の方は資料代として500円が必要です)  
お申込 棚田学会事務局(ふるさときゃらばん内) 電話:042-381-6721

---

#### 編集後記

富山県棚田ネットワークに今年から参加した上市町は、10年程前から子供たちの農業の体験教育の場に棚田を活用してる。「この辺りでは涼田(あわらだ)と言って胸まで浸かって田植えをしたものです」と教育長さん。棚田は農業の不思議やおじいちゃんおばあちゃんの子どもの努力を子どもに伝える絶好の場。会員の皆さんからの、各地の棚田に関するお便りをお待ちしています。 編集部